

ZOOM
UP

Potential of Central Asia 可能性を秘めた中央アジア

2015年10月の安倍総理による中央アジア5カ国（ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン）訪問をはじめ、要人往来の活発化や経済協力の進展など、我が国との間で交流の輪が広がる中央アジア。今後、関係の一層の深化が期待されている。本特集では、日本と中央アジアとの交流のあゆみやその重要性、近年の経済状況、我が国地方自治体との交流事例について紹介し、日・中央アジア地域間交流の今後の発展可能性を模索する。
〔総務省自治行政局国際室〕

1

日・中央アジア地域間交流に向けて

外務省欧州局中央アジア・コーカサス室

中根一幸外務副大臣挨拶

日本と中央アジア諸国は、昨年、外交関係樹立25周年を迎えました。この四半世紀で我が国と各国との関係は幅広い分野で発展してきました。特に、2015年秋、安倍総理が総理として初めて中央アジア5カ国を歴訪したことが大きな推進力となりました。今回、このように時宜を得たタイミングで、中央アジアを特集に取りあげていただき大変嬉しく思っています。

さて、「中央アジア」と聞いて皆様は何を連想されるでしょうか。広大な草原やオアシスが広がるシルクロードの情景を想像し、ロマンチックで歴史的な響きを感じる方もいらっしゃるかと思います。昨年8月、私は国際博覧会の大阪誘致を働きかけるため、カザフスタンで開かれたアスタナ国際博覧会を訪問しました。その際、雄大な草原の中に現れる豊かな近代都市の姿に、中央アジアの歴史と活力の一端を感じるところがありましたが、



提供：外務省

「中央アジア」と聞いてあまりイメージが湧かないという方も多いのではないのでしょうか。

中央アジアは、かつて東西の文化交流を担ったシルクロードにおいて重要な役割を担ってきました。例えば、仏教の伝播では、インドからもたらされた仏典は最初に中央アジア出身のソグド人によって西域の言葉から翻訳されたと言われていました。また、正倉院宝物の中に、中東・エジプトやローマの要素が溶け込んだシルクロード由来の品々があることをとって、当時の我が国が世界につながるためにシルクロードは大変重要だったのだと思います。大航海時代に海路が陸のシルクロードに取って代わり、また、ロシア帝国やソ連の一部となった中央アジアがあまり存在感を示せない時代もありましたが、最近、中央アジアの重要性が改めて見直されており、日本としても一層中央アジアとの関係を強化していく必要があると思います。

中央アジアには、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタンの5カ国があります。日本の10倍強の総面積に7,000万人以上の人口が暮らしています。石油、天然ガスなどの豊富なエ

エネルギー・鉱物資源があり、ダイナミックに成長する中国や、ロシア、南アジア、中東といった政治的・経済的に重要な国・地域を結ぶユーラシア大陸の中心です。

日本は、こうした点を踏まえ、中央アジアの「開かれ、安定し、自立的な発展」を支え、地域の平和と安定に寄与することを中央アジア外交の基本方針とし、①二国間関係の抜本的強化、②「中央アジア+日本」対話を通じた地域共通の課題への関与、③グローバルな舞台での一層の協力、を「三本柱」として外交を推進しています。

日本の中央アジア外交の特徴は、2004年に「中央アジア+日本」対話を立ち上げ、地域協力を促す「触媒」になろうと努めてきたことです。中央アジア5カ国は多くの共通点とともに独自色も豊かです。各国が違いを乗り越え地域共通の課題に一緒に取り組めるようになれば、地域が安定し、各国の自立的な発展も可能になります。また、各国はさまざまな潜在性に満ちており、世界に開かれた国際社会の重要なプレーヤーにもなれると確信しています。これまで、6回の外相レベルの会合を含め、6カ国の代表で一つのテーブルを囲んで対話を続けてきた結果、地域協力が重要であるとの認識が中央アジア諸国に浸透し、今では農業、運輸・物流といった具体的な分野での実践的協力の方策を議論できるまでになっています。

もう一点申し上げたいのは、中央アジアの「人づくり」への貢献、そして日本との人的交流の促進を常に重視してきたことです。独立から25年間で、日本は中央アジア諸国から約1万人の研修員を受け入れ、日本から約3千人の専門家を派遣してきました。このような人の往来自体、日本人と現地の方々との交流の機会を数多く生み出してきましたが、同時に、日本で学んだ留学生から各国の大臣・次官やビジネス界のリーダーが育ってきていることも重要です。こうした若いリーダーが各国で活躍し、日本の魅力や日本人について発信してくれるお陰で、中央アジア諸国はとて親日的ですし、日本の知見や技術を国造りに役立てたいという強い意欲が感じられます。

さて、地域間交流や自治体交流について考えてみますと、まさに人と人との交流の促進につながるもので、国同士の外交関係を支える基礎として大変有意義です。最近、日本の地方自治体からも中央アジアへの関心や実際の交流について耳にする機会が増えており、大変嬉しく思っております。例えば、第二次大戦後にシベリアから中央アジアに移送された日本人抑留者とのつながりから、

京都府舞鶴市とウズベキスタンとの交流が始まっています。2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、京都府舞鶴市と愛知県名古屋市がウズベキスタンを、また山形県天童市・山形県がトルクメニスタンを、さらに奈良県橿原市・奈良県がカザフスタンを相手にホストタウンとして登録され、交流が始まっています。また、広島県広島市とカザフスタンのセメイ市（元セミパラチンスク市）も、原爆や核実験による被害という共通の経験から交流が始まり、一昨年、ナザルバエフ大統領が広島平和記念資料館を訪れました。この他にも、日本の地方自治体の皆様の協力の下、さまざまな取組が進んでいると聞いており、大変心強く感じております。

中央アジア諸国は大変親日的で、歴史的にもシルクロードを通じて日本と近い縁があり、国際社会でも地理的・地政学的な重要性から「東西の架け橋」としての評価が改めて高まっています。こうした中、これから日本との自治体間交流、地域間交流が進んでいくのも自然な流れではないかと思いますが、一方で我が国と文化や習慣が異なったり、国と地方との関係など制度面での違いがあったりと、ご不明な点も色々出てくるのではないかと思います。外務省としましては、日本と中央アジアの地域間交流、自治体間交流を最大限支援させていただきたいと考えており、お困りの点等があれば遠慮なくご相談いただければと思います。是非この機会にできるだけ多くの自治体関係者の方々に中央アジアとの交流に関心をもっていただければ幸いです。

(以上、中根副大臣挨拶)

最近の日本と中央アジア諸国との外交関係

(1) 安倍総理の中央アジア5カ国歴訪

2015年10月、安倍総理大臣は日本の総理大臣として初めて中央アジア5カ国を歴訪した。日本の総理として、ウズベキスタン及びカザフスタンには9年ぶり、キルギス、タジキスタン及びトルクメニスタンには初の訪問となった。訪問では、各国大統領との首脳会談及び二国間共同声明の発表のほか、日本人抑留者墓地への献花等を通じて、日本と中央アジア諸国との絆を確認した。また、この歴訪には民間企業や大学関係者など計50団体が同行し、トルクメニスタン、ウズベキスタン及びカザフスタンにおいてビジネスフォーラムが開催され

た。また、5カ国を通じて官民合わせて87件の文書に署名され、日本企業の中央アジアにおけるビジネス展開への後押しとなった。さらに、安倍総理訪問のフォローアップとして我が国から文化



ナザルバエフ大学での中央アジア外交に関する政策スピーチ（提供：内閣広報室）

ミッションが各国に派遣され、日本と中央アジア諸国との関係を国民レベルでさらに深め発展させていくための交流事業を考察する提言がまとめられるなど、2国間関係を更なる高みに引き上げる歴史的な訪問となった。

(2) 「中央アジア+日本」対話・第6回外相会合

2017年5月、トルクメニスタンの首都アシガバットにおいて、「中央アジア+日本」対話・第6回外相会合が開催された。日本と中央アジア各国との外交関係樹立25周年に開催された今回の外相会合では、中央アジア全5カ国から外相の出席を得て、日本が果たしてきた地域協力の「触媒」としての役割に高い評価がなされるとともに、「中央アジア+日本」対話が実践的な協力を推進する場として進化していることが歓迎された。

会合の結果、日本と中央アジア各国との幅広い協力関係を象徴する「共同声明」に署名した。特に、北朝鮮問題に初めて言及し、核実験及び弾道ミサイルの発射は容認できない旨を断固として表明し、北朝鮮に対し具体的な行動を断固として求め、さらに、拉致問題を含む人道問題の解決の重要性を強調したことは特筆に値する。また、「運輸・物流分野地域協力ロードマップ」を採択し、日本としてこの分野での具体的な協力を行うべく、「運輸・物流協力イニシアティブ」を打ち出し、240億円規模の支援を表明した。



「中央アジア+日本」対話・第6回外相会合

(3) 中央アジアの認知度向上に向けた取組

外務省は、日本と中央アジアとの関係の更なる発展には、日本における中央アジアの認知度の向上が必要との考えのもと、近年、ポップカルチャーや市民参加型の要素も取り入れさまざまな取組を行っている。

2016年9月、「中央アジア+日本」対話・第9回東

京対話を「知られざる中央アジア：その魅力と日本との絆」と題して開催した。さらに、従来の公開シンポジウムだけでなく、映画祭、音楽祭、大使館オープンイベントという3つの文化交流イベントを企画した。

2017年8月、同第10回東京対話を「日・中央アジア関係の今と未来を展望する」と題して開催した。さらに、漫画家・森薫氏の中央アジアを舞台にした作品の原画展を外務省で開催したほか、中央アジアの代表的な料理を手軽に作れるレシピ動画を作成してYouTubeの外務省チャンネルに掲載した。また、森薫氏に全7話の書き下ろし漫画「中央アジアクッキング」を制作いただき、外務省ホームページに順次掲載している。



「中央アジア+日本」対話イメージキャラクター（右）と外務省HPで連載中の料理漫画「中央アジアクッキング」（左）

中央アジアとの自治体間交流と今後の展開

中央アジア諸国と我が国との自治体間交流の歴史はまだ萌芽期にあり、現時点で姉妹都市提携を締結済みの都市はないが、安倍総理による中央アジア歴訪とそのフォローアップが進む中で、経済、文化、スポーツ・学術交流といった幅広い分野で交流が盛んになっている。昨年5月の「中央アジア+日本」対話・第6回外相会合で、我が国は、ビジネス関係強化、人的交流の更なる促進を目的として中央アジア5カ国に対する査証緩和措置の導入を表明した。2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に際するホストタウン誘致に向け中央アジア諸国と我が国自治体との交流も活性化してきている。外務省としても中央アジア諸国の日本での認知度向上に資するさまざまな取組や参加型イベントなどを継続し、自治体間交流をはじめとする人的交流を力強く推進していく。

2

日本と中央アジアの経済交流

経済産業省通商政策局ロシア・中央アジア・コーカサス室

カザフスタン

日本とカザフスタンの関係は深化を続けており、その協力分野は従来の天然資源開発に留まらず、エネルギー、インフラ、農業、物流等に拡大している。日本は、カザフスタンから主に非鉄金属等の鉱物を輸入し、輸送機械等を輸出している。

また、1998年9月には日本企業が同国北カスピ海沖合にあるカシャガン油田の権益の一部を取得している。

同国は、収入の約4割を石油収入に依存しており、2015年は油価下落のため経済が低迷したが、2016年後半の油価の底打ちを受け、経済は回復基調にある。

(日本カザフスタン経済官民合同協議会)

2008年6月、福田総理(当時)とナザルバエフ大統領の会談時に、貿易・投資の拡大に向けた環境整備や経済分野の協力を包括的に協議する「官民合同の枠組み」の構築に合意した。2009年から、両国の官民が発表と討議を重ねている(日本側議長は経済産業審議官、副議長は日カザフ経済委員会会長)。



2016年11月 日本カザフスタン経済官民合同協議会

(アスタナ国際博覧会の開催)

同国の首都アスタナにて、2017年6月10日から9月10日に国際博覧会が開催され、日本も参加した。同博覧会は「Future Energy (将来のエネルギー)」をテーマとし、パビリオン等で二酸化炭素排出の削減やエネルギー効率の実践等に関する展示が行われた。



中心の丸い建物が博覧会の会場



日本館の外観



アスタナの街並み



マクロデータ：

- 人口：1,820万人
- GDP：1,337.6億ドル、1人当たりGDP：7,453ドル(2016年IMF)
- 経済成長率：1.08% (2016年IMF)
- 貿易：(2015年CIS統計委員会)
 - (1) 輸出459.6億ドル(石油、石油製品、金属・金属製品等)
 - (2) 輸入305.7億ドル(機械設備、化学製品、食料品等)
- 対日貿易：(2016年ロシアNIS貿易会)
 - (1) 対日輸出：576.2百万ドル(鉄鋼、原油および原油等)
 - (2) 対日輸入：192.5百万ドル(輸送用機械、一般機械等)

ウズベキスタン

ウズベキスタンは良質な綿花を生産しており、日本はタオル等の原料として輸入している。日本からは、主に機械・設備を輸出している。

また、ウズベキスタンの電力の安定供給および、エネルギー効率の向上のため、日本政府と企業が協力している。

(日本ウズベキスタン経済合同会議)

両国の貿易・投資の拡大と経済・科学技術の協力関係の発展、両国の通商振興等を目的として、1994年から「日本ウズベキスタン経済合同会議」を開催し、日本の民間企業が交流を続けている。

経済・貿易に関する情報の交換、講演会の開催、両国の代表団の派遣および受入れ、関係各国の政府機関および経済界に対する働きかけなどを行っている。



2016年4月 日本ウズベキスタン経済合同会議



マクロデータ：

- 人口：3,030万人
- GDP：665億ドル、1人当たり2,121ドル（2016年IMF）
- 経済成長率：7.8%（2016年IMF）
- 貿易：（2014年CIS統計委員会）
 - (1) 輸出：141.1億ドル（エネルギー、サービス、食料品他）
 - (2) 輸入：139.6億ドル（機械・設備、化学製品、食料品他）
- 対日貿易：（2016年ロシアNIS貿易会）
 - (1) 対日輸出：2.6百万ドル（非鉄金属、綿織物、綿花等）
 - (2) 対日輸入：162百万ドル（輸送用機械、原動機、発電機等）

トルクメニスタン

トルクメニスタンは豊富な天然ガスを産出し、その輸出と綿花生産を基盤に経済成長を目指している。同国は天然ガスの搬出ルートの多様化を模索しており、中国、アフガニスタン、インド、パキスタン、トルコとの関係を強めている。日本は、2015年の安倍総理の訪問以降、エネルギー分野での交流を深めている。

（日本トルクメニスタン経済合同会議）

2017年6月、第12回日本トルクメニスタン経済合同会議が東京で開催され、両国のさらなる貿易・投資関係の発展に向けた課題について議論された。



2017年6月日本トルクメニスタン経済合同会議

マクロデータ：

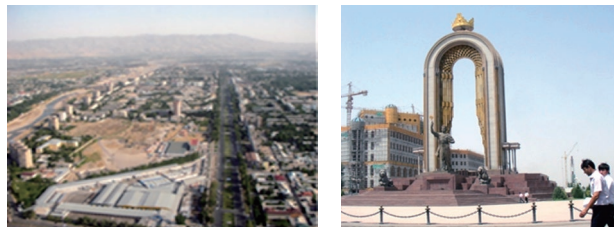
- 人口：540万人
- GDP：361.8億ドル、1人当たり6,622ドル（2016年IMF）
- 経済成長率：6.2%（2016年IMF）
- 貿易：（2015年国家統計委員会）
 - (1) 輸出：121.7億ドル（天然ガス、石油、石油製品、織物、綿繊維等）
 - (2) 輸入：140.6億ドル（生産技術プラント、電気機器、機械装置、輸送機器等）
- 対日貿易：（2016年ロシアNIS貿易会）
 - (1) 対日輸出：0.1百万ドル（衣類、原料別製品等）
 - (2) 対日輸入：398.5百万ドル（一般機械等）

タジキスタン

タジキスタンは水資源の豊かな美しい山国で、国土の98%が山岳地帯です。現在、同国はIMF・世界銀行と協力しながら開発を進めており、綿花栽培を中心とする農業や牧畜が主要産業となっている。

また、小規模ではあるものの、金・銀・銅・モリブデン・アンチモン等の鉱物資源を産出している。

現在のところ、日本とタジキスタンの貿易、経済の交流は限定的なものとなっているが、2017年4月に日本タジキスタン経済・技術・科学協力政府間委員会の第1回会合が開催されており、今後の両国関係の発展が期待される。



ドゥシャンベの街並み

マクロデータ：

- 人口：870万人
- GDP：69億ドル、1人当たり799ドル（2016年IMF）
- 経済成長率：5.9%（2016年IMF）
- 貿易：（2015年CIS統計委員会）
 - (1) 輸出：8.9億ドル（繊維、繊維製品、電力、鉱物製品等）
 - (2) 輸入：34.4億ドル（石油製品、鉱物製品等）
- 対日貿易：（2016年ロシアNIS貿易会）
 - (1) 対日輸出：1.2百万ドル（植物性原材料、非鉄金属等）
 - (2) 対日輸入：3.7百万ドル（建設、輸送用機械等）

キルギス

キルギスは自然豊かな国で、農業や畜産業がさかんであり、GDPの約3割は、これらの分野で占められると言われている。

最近では、キルギスの食品関連企業が来日し、日本企業の加工技術の見学や事業パートナーを求めてマッチング事業に参加するなど、両国の貿易・投資を促進するための交流が行われている。



ビシュケクの街並み

マクロデータ：

- 人口：600万人
- GDP：65.5億ドル、1人当たり1,072ドル（2016年IMF）
- 経済成長率：0.4%（2016年IMF）
- 貿易：（2016年キルギス国立銀行）
 - (1) 輸出：15.4億ドル（貴金属、鉱物製品、繊維製品、野菜・果物他）
 - (2) 輸入：39.2億ドル（鉱物製品、運輸関連製品、機械設備、化学製品他）
- 対日貿易：（2016年ロシアNIS貿易会）
 - (1) 対日輸出：0.4百万ドル（非鉄金属、食料品）
 - (2) 対日輸入：8.5百万ドル（機械類、輸送用機器等）

3

日本と中央アジアとの地域間交流の現状と展望

総務省自治行政局国際室

日・中央アジア地域間交流の現状

日本と中央アジア諸国との間では、歴史・文化・スポーツ等を通じたさまざまな形の地域間交流の取り組みが行われている。現在取り組まれている地域間交流には、歴史的背景に基づく交流、ホストタウンの仕組みを活用した交流およびJETプログラムを活用した交流という大きく3つの形がある。

具体的な交流の取り組み

(1) 歴史的背景に基づく交流

日本と中央アジア諸国とのつながりはさまざまだが、現在、歴史的な背景に基づいて地域間交流が行われている事例としては、以下のようなものがある。

①群馬県富岡市

富岡市はウズベキスタンのリシタン市との間で交流に取り組んでいる。ウズベキスタンは、シルクロードに位置し、伝統産業である絹産業が古くから盛んである。富岡市には、明治期に建設され、世界遺産にも登録された富岡製糸場がある。こうした絹産業の歴史を共通点として、ウズベキスタン大使や富岡市長等の往来、リシタン市の学生の富岡市訪問などの交流が行われている。

②京都府舞鶴市

舞鶴市はウズベキスタンとの間で交流に取り組んでいる。ウズベキスタンには、第二次世界大戦後、当時のソ連によって抑留された日本人が多く送られ、劇場等の建設に従事した歴史があり、首都タシケント市には抑留者の功績に関する資料を展示した日本人抑留者資料館がある。舞鶴市は、抑留者が帰国した引揚地のひとつであるという歴史を持ち、関連する資料を展示した舞鶴引揚記念館を有している。こうした抑留に関する歴史を共通点として、ウズベキスタン要人や舞鶴市長等の往来、学校での食文化の紹介などの交流が行われている。

(2) ホストタウンの仕組みを活用した交流

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会

に向けて、参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図る地方自治体が「ホストタウン」として登録されている。中央アジア諸国については、現時点で、名古屋市と京都府舞鶴市がウズベキスタンの、奈良県橿原市・奈良県がカザフスタンの、山形県天童市・山形県がトルクメニスタンのホストタウンとなっている。今後、各国の選手らがこれらのホストタウンを訪れ、事前合宿や歴史・文化の紹介を通じた交流が行われていく。

(3) JETプログラムを活用した交流

外国との交流を行うにあたりその国の言語や文化を解する者の存在が重要であることから、JETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業、The Japan Exchange and Teaching Programme）によってCIR（国際交流員、Coordinator for International Relations）を配置し地域間交流を行っている地方自治体が多くある。中央アジア諸国との地域間交流においてもCIRが活用されており、これまで、カザフスタンおよびウズベキスタンからCIRを招致している。2018年1月現在、ウズベキスタンからのCIRが東川町と舞鶴市に配置されている。今後、ホストタウンの相手国との間で連絡調整を行うなど、CIRが架け橋となり歴史・文化・スポーツ等の交流が行われていくこととなる。

今後の展望

現在、官邸に「日・中央アジア交流促進会議」が設置され、政府全体として中央アジア諸国との関係強化が重要視されている。地域間交流についても、関係強化のテーマの一つとして位置付けられている。

今後、現在進められている取り組みが、より幅広い分野における交流や姉妹都市提携といったより深い交流へと発展していくことが期待される。

併せて、本特集に登場する事例をはじめとした先駆的な取り組みを参考として、多くの地方自治体において中央アジア諸国との地域間交流が始まっていくことが望まれる。

交流のきっかけ

我がまちの「富岡製糸場」がシルクを通じ日本の発展と産業の近代化に大きな貢献を果たしたことが認められ、世界遺産に登録された 2014 年。まちが世界遺産登録に沸くかたわらで、外国産シルクの台頭による国産シルクの需要減により、絹産業を支えた地元の養蚕業は衰退の一途をたどり、市内の養蚕農家はわずか 12 軒に減少している状況である。世界遺産登録のストーリーを語る上で、欠くことのできない地元の養蚕業が絶滅の危機に瀕していることは、ストーリーが途絶えかねない大きな問題であり、富岡市では養蚕業の復活を目指し、さまざまな取り組みを行っている。そのような状況下、かつて養蚕業が盛んであったウズベキスタンを紹介され、岩井市長自ら 2015 年 4 月に、シルクロードの中継地点として繁栄したウズベキスタンのシルクの歴史をたどるため、彼の地を訪れた。そこで、フェルガナ地方のマルギラン市で養蚕や絹産業の視察を行うと同時に、リシタン市にある日本語学校 NORIKO 学級を訪れた。この訪問が、のちの NORIKO 学級と富岡市との交流に発展するきっかけとなった。NORIKO 学級は、ウズベキスタンがロシアから独立した後、開発に携わった建設機械のコマツの社員であった故大崎重勝氏が現地に赴任した際、お金のな

い子どもたちが本を読み、勉強でき、心の安らぐ場所を作ろうという意志で 1999 年に自費を投じて作った日本語学校である。NORIKO 学級はこの大崎氏の奥様の名前から命名されたもので、大崎氏の意志が今でも受け継がれ、校長のガニシエル氏がボランティアで運営を行っており、学校とは言うものの、日本で言う昔の寺子屋といったところで現地の 8 歳から 20 歳前後の若者約 60 人が無料で日本語を学んでいる。

NORIKO 学級からの招へい事業

岩井市長の訪問をきっかけに、同年 12 月には富岡製糸場でウズベキスタン展を開催し、市民や富岡製糸場を訪れた観光客の皆様にご覧いただき、ウズベキスタンを紹介するとともに、遠い昔のシルクロードを通じた両国の絹産業のつながりを紹介した。



リシタン市訪問時、ガニシエル校長（左）と岩井市長（2015 年）



富岡製糸場でのウズベキスタン展の様子（2015 年）



招へいた学生（手前の2人）と地元小学生たちが一緒に給食（2016年）

その後、2016年10月、NORIKO学級からガニシエル校長と2人の女子学生の富岡市への招へいが実現し、新たな交流の歴史がスタートした。招へい時には、富岡市で2年に一度の「富岡どんとまつり」が開催されており、その際、駐日ウズベキスタン大使にもお越しいただき、校長、学生と共に富岡の祭りを楽しんでもらうとともに、市民との交流を図ることができた。学生2人は、富岡で経験することすべてが新鮮だったようで、市内小学校、富岡製糸場の見学、歴史ある貫前神社と妙義神社への参拝、また日本三奇勝の妙義山への登山など、市内の名所を案内するとともに市民との交流を図ることができた。そして、2017年10月、NORIKO学級から2回目の学生の招へいを行い、2人の男子学生と1人の女子学生が富岡市を訪れた。今回は、前回と異なり市内を案内し、市民と交流するだけでなく、本人たちの希望により、市内の介護施設において3日間の職場体験を行った。そこでは、入所されているお年寄りたちと日本語で



介護施設でお年寄りとコミュニケーション（2017年）

コミュニケーションを取り、彼らの和やかな対応により入所者や施設で働くスタッフからも非常に好評を得ることができた。この2年にわたる招へい事業の成功は、ご好意により彼らを快く受け入れてくれたホストファミリーの協力を無くして語ることはできない。2回の招へい事業で6軒のお宅にご協力いただき、学生たちを受け入れていただいたが、学生たちの純朴な人柄や日本語でのコミュニケーション能力の高さから、大きなトラブルもなくホストファミリーからは、受け入れたことをとても喜んでいただくことができた。最初に受け入れてくれた1軒のホストファミリーは、家族で翌年ウズベキスタンを訪れ、現地で学生との再会を果たし、まさに市民レベルの交流に発展した。



招へいた学生（前列の3人）とホストファミリー（後列の3人）との記念撮影（2017年）

NORIKO学級のガニシエル校長は、日本語を学んでいる現地の学生たちが、今後、学んだ日本語を生かせるような交流を切に願っており、富岡市としても、校長の願いに応えられるよう今後の交流について検討をはじめている。2回目の学生の招へい時には、招へいた学生を通じ、リシタン市長から岩井市長への親書が届き、自治体間の交流に発展することを望む内容で、富岡市としてもNORIKO学級との交流から自治体間への交流へ、さらにはウズベキスタンとの交流の原点である、絹産業の交流に発展することを望んでいる。

また、今年2月には富岡市国際交流協会の事業で、富岡市民訪問団の約20人がウズベキスタンを訪問し、NORIKO学級への訪問と交流事業が予定されている。この記事が掲載される頃には富岡市とNORIKO学級の交流の新たな歴史が刻まれていることであろう。

「ウズベクを舞台にしたマンガ『乙嫁（おとよめ）語り』、知っていますか?」、「読んだことがあります。日本のマンガ、大好きです。」

「ウズベキスタンの料理、食べたことはありますか?」

「プロフ、作って食べました。」 順番にカメラの前に座り、日本語で会話する高校生たち…。

スマートフォンのビデオ通話アプリを使った交流授業が行われているのは、京都府舞鶴市内にある聖ヨゼフ学園日星高等学校の教室だ。

ウズベキスタンの首都タシケントにある国立東洋学大学付属アルマザール高校日本語科の生徒との交流授業が行われている。



ウズベキスタンの高校生と会話をする日星高校生

安倍総理のウズベキスタン訪問

交流のきっかけは、2015年秋の安倍総理のウズベキスタン訪問だ。安倍総理は、タシケントで日本人墓地や、日本人抑留者が建設に関わったナボイ劇場を視察、また、長年、日本人抑留者資料館を自費で運営してきたスルタノフ館長に面会し、館長を日本へ招待する意向を伝えた。スルタノフ館長は、来日にあたって、自身が運営する資料館と同様の資料を展示する舞鶴引揚記念館の訪問を希望した。このことが、舞鶴市にとっての、ウズベキスタンとの交流の出発点になった。

日本人抑留者資料館と引揚記念館

舞鶴市は、戦後66万人の引揚者と1万6,000余柱の遺骨を受け入れた引揚のまちだ。舞鶴引揚記念館は、引揚の史実を後世に語り継ぎ、平和の祈りを発信し続けている施設で、収蔵資料はユネスコの世界記憶遺産に登録されている。

2016年1月、来日したスルタノフ館長夫妻と孫娘のリソラットさんが引揚記念館を訪問した。館長は、歓迎交流会に参加した中高生に対し、ナボイ劇場建設に際し、過酷な状況でも勤勉であった抑留者の行動が親日感

情につながっているエピソードなどを紹介した。また、リソラットさんはウズベクダンスを披露し、同世代の高校生たちと仲良くなった。その後、日星高校生はSNS（インスタグラム）を活用し、リソラットさんとの交流をスタートさせた。



スマホで自撮りをするリソラットさんと高校生

東京五輪の事前合宿誘致へ

翌月、多々見良三舞鶴市長が、駐日ウズベキスタン共和国大使館を訪問。駐日大使に、ナボイ劇場建設に関わった抑留者が舞鶴へ引き揚げたことによる舞鶴市との縁を説明し、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会のレスリングの事前合宿の誘致を要望し、今後の交流への思いを伝えた。そして、舞鶴市は、3月にウズベキスタンのホストタウン申請を行い、6月ホストタウンに登録された。

大使館のレシピで相手国を理解

ウズベキスタンは1991年の旧ソ連の崩壊に伴い独立した若い国であり、市民の認知度も低いため、まずは、食文化を通じて、子どもたちにウズベキスタンを知ってもらう事業から進めることとした。

2016年4月、市教育委員会の栄養教諭が大使館で伝統料理（プロフ）のレシピを学び、全小学校の給食担当者に伝授した。それを受け、秋には、全小学校でウズベキスタン給食を実施したほか、日星高校生も秋の文化祭でプロフを作り、提供した。

11月には、駐日大使が来訪し、小学校児童との給食や、事前合宿施設の視察、市民と



小学生とウズベキスタンの伝統料理給食を食べるトゥルスノフ駐日大使（当時）

の交流などを行った。大使が、市民の歓迎ぶりを本国に伝えた際に、柔道連盟の幹部から「レスリングとあわせて柔道も舞鶴で合宿を」との提案があった。

国際交流員配置と 体育スポーツ大臣来訪

2017年8月には、JETプログラムにより、国内で2人目となるウズベキスタンからの国際交流員（CIR）を配置した。ウズベキスタンの政府機関等との調整や、小学校訪問、団体向けの講演・料理教室など、多様な交流事業に従事している。

同じく8月には、ウズベキスタンの体育スポーツ大臣を団長とする訪問団が来訪した。合宿施設の視察を行うとともに、公民館や体育館、学校、引揚記念館などさま

ざまな場所で、多くの市民と交流を深めた。歓迎交流会では、子どもたちが、五輪予選の必勝祈願の大漁旗や、国旗をデザインした千羽鶴を作成し、訪問団に贈呈した。



千羽鶴を持って記念撮影をする訪問団と小学生

ウズベキスタン展で市民理解を

10月には、市民に広くウズベキスタンのことを知ってもらおうと、日本ウズベキスタン協会や駐日ウズベキスタン共和国大使館との共催により「ウズベキスタン展



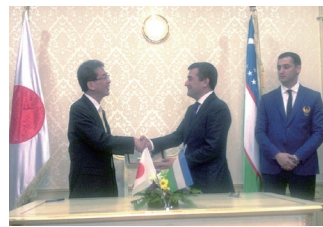
ウズベキスタン展の展示の様子とキンモクセイのアクセサリー（右下）

inホストタウン舞鶴」を開催した。写真展や、民族衣装と民芸品の展示、舞鶴との縁を紹介する展示のほか、スルタノフ館長が製作した記録映画『ひいらぎ』も上映した。

また、『ひいらぎ』を鑑賞した日星高校生は、映画で、抑留者がウズベキスタンに残した功績を、キンモクセイの残り香になぞらえていたことから、館長とリソラットさんにキンモクセイの香りを市の訪問団に託して届けることを計画した。摘み取ったキンモクセイの花をアクリル樹脂（レジン）で固めたアクセサリーとポプリを作成し、会場に展示した。

市代表团による交流の下地づくり

11月には、多々見良三舞鶴市長を団長とする代表团が、レスリング・柔道の事前合宿実施の覚書を取り交わすため、ウズベキスタンを訪問した。代表团には、引揚・海外調査メンバーも同行し、



事前合宿実施の覚書の署名後、握手をする多々見良三舞鶴市長（左）と、ウズベキスタン副首相の五輪委員会スルタノフ会長（中央）

市ヤッカサライ区の日本人墓地と日本人抑留者資料館を訪問した。抑留者が建設したまち、アングレン市の抑留調査も行った。

また、今後、スポーツだけでなく、文化や経済面での幅広い交流を進めるため、タシケント市ヤッカサライ区長や、歴史観光都市サマルカンドの市長、関係省庁の閣僚とも面談した。

アルマザール高校の訪問では、舞鶴市長が、約100人の学生の前で日星高校生の交流の思いを込めたメッセージを朗読するなど、今後の交流への下地づくりを行った。

訪問団が帰国した2週間後、日星高校とアルマザール高校のビデオ通話による交流授業が実現した。授業を終えた日星高校の水嶋校長は、「この交流を核にした生徒の研修旅行を考えたい」と、今後の学校交流の希望を述べた。

引揚・抑留の縁を オリンピックレガシーに

市では、今後、市内の全小学校において、ウズベキスタンの伝統料理の給食とセットにした学習を継続するほか、中学校では、新たに、ふるさと学習教材を作成し、より深く掘り下げた学習を行う予定である。

次代を担う子どもたちや若者が、地域学習として引揚・抑留を学び、ウズベキスタンとの関係性への理解を深める中で、オリンピックを契機としたウズベキスタンとの絆を確かなものにしていく。2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会まで2年半、ホストタウンとしての準備をしっかりと進めるとともに、次代を担う若い世代の交流を着実に支援しつつ、オリンピックの後も多様な交流をレガシーとして未来につなげられるよう取り組んでいきたい。

北海道「写真の町」東川町の紹介

私は、2015年からJETプログラムの国際交流員(CIR)として北海道東川町で勤務している。ウズベキスタンのタシケント出身でタシケント国立東洋学大学大学院で日本語を専攻していた。

私が勤務している「東川町」は北海道のほぼ中央に位置し、日本最大の自然公園「大雪山国立公園」の最高峰・旭岳を見渡す人口約8,300人の自然豊かな町である。

その東川町には「国道」、「鉄道」、「上水道」の3つの「道」がない。北海道で唯一、上水道のない町であり、東川町ではすべての町民が旭岳の雪解け水からなる地下水で生活している。一般的にはマイナスの印象を受けるかもしれないが、東川町には人を魅了する幾多の要因がある。

北海道第2の都市である旭川市に隣接し、車で10分ほどの距離にある旭川空港を利用すれば、東京との行き来も容易であるという地理的条件のほか、自然の恵みを生かした東川米を中心とする農業、町内にはカフェや飲食店、アパレルショップのほか、木工・陶芸などの工房が点在し、それらが相まって町の文化価値を生み出している。

また、雇用や医療・福祉などの定住施策、移住施策、出産や子育て支援施策など、行政が長年かけてさまざまな施策を継続してきたことが、住むこと、働くことの均整を保ち、1995年以降の人口増へとつながる魅力的な町となっている。

1985年には世界初となる「写真の町」を宣言し、高校生日本一の写真を決める「写真甲子園」、国際写真展の



東川町の方との交流（写真左端が筆者）

「東川町フォトフェスタ」、国外の高校生による写真文化を通しての交流「高校生国際交流写真フェスティバル」を毎年開催し「写真の町・東川」としての顔を持っている。

このように東川町ならではの文化を生成してきた背景には、自治体独自の積年の努力と、大自然に囲まれて育まれた生活文化への向上心が、次世代へと継承される道となり今の東川町がある。

ウズベキスタンの紹介

ウズベキスタンは東洋と西洋を結んだシルクロードの真ん中に位置したことから“シルクロードの十字路”と称され、東西を行き交う旅人、物、そして文化がウズベキスタンで融合し花開いた。ウズベキスタンは日本からおおよそ、6,400km離れた中央アジアに位置しており、面積は日本の約1.2倍、人口は3,030万人の国である。5カ国からなる中央アジア諸国は、いずれも1991年に旧ソ連が崩壊して生まれた新しい国である。ウズベキスタンから海へと出るには二つの国の国境を越えなければならない。加えて、海へと直接つながる河川はなく、領土の10%にも満たない灌漑農用地や河川流域のオアシスに似た土地で集中的に農業が行われている。ウズベキスタンの主な産業は、かつては綿花が主要品目だったが、現在は小麦の生産量が増加している。また、天然資源も豊富で、金や石炭、鉛などはウズベキスタン経済において重要な分野となっている。



ウズベキスタンの首都タシケント

東川町の取り組みとウズベキスタンとの交流

①写真を通じた交流

東川町とウズベキスタンとの交流の始まりは、元ウズベキスタン大使で現参議院議員の中山恭子氏が小学生時代を東川町で過ごしたことが縁となり、写真を通じた交流から始まった。

2017年には東川町で行われている写真甲子園を題材とした映画が製作・発表され、現在ウズベキスタンでの上映に向けて調整を進めている。海外の方々にも日本の高校生たちの熱き青春ストーリーを感じてほしいという想いで、プロモーション活動を展開している。

2015年から毎年開催している「高校生国際交流写真フェスティバル」には、ウズベキスタンを含む海外の13の国と地域から代表校が参加し、約1週間、写真を通して東川町民や各国の高校生との交流を深めている。2018年第4回高校生国際交流写真フェスティバルへの高校生の招聘やウズベキスタンで開催されるフォトビエンナーレへの参加など、ウズベキスタンとの交流のきっかけとなっている「写真」を通しての交流を引き続き行い、世界に開かれたまちづくりを展開していきたい。



高校生国際交流写真フェスティバル
ウズベキスタンからの参加者



「私の町の自慢できるもの」をテーマとした高校生国際交流写真フェスティバルでのウズベキスタンの高校生の作品
(予選応募作品6枚組のうちの1枚)

②日本語研修を通じた交流

2015年には全国初の町立日本語学校を開設し、町内には280人の日本語を学ぶ外国人留学生・研修生が暮らしている。

2014年からは、ウズベキスタンの大学で日本語を学んでいる学生を招聘し、東川町立東川日本語学校で3カ月の日本語研修を行うプログラムが始まった。ウズベキスタンから毎年20人程度、4年間で88人の学生が参加し、日本語の授業のほか、体験学習を交えながら日本語と日本の文化について学んだ。



ウズベキスタン特別講座に参加した約20名のウズベキスタンからの学生と東川町民

③農業交流

2016年には、ウズベキスタンのスイカとメロンを東川町の特産品に育てようと、農業交流試験栽培が開始された。東川町、JAひがしかわ、町内農家の方々が協力し合い、東川町の環境でも成長する可能性のある品種を町内数カ所の圃場で栽培し、どちらも無事に収穫することができた。

今後は、東川町の新たな特産品やふるさと納税の返礼品への利用を考えており、試験栽培は継続して行う予定でいる。



東川町にて品種改良したウズベキスタンのスイカ

加えて、東川町とウズベキスタンとの食農に携わる人材の交換研修を行い、新しい技術や知識の習得、農産品の開発・発展などを目的とした事業を展開したい。

④書籍等の翻訳

東川町、大雪山を舞台にした動物の物語『牙王物語』は各国での出版に向け翻訳を進めており、11月にはウズベキスタンへ訪問した際にロシア語に翻訳したものを出版社へ持って行き意見交換を行った。一方、文化・環



『牙王物語』

境の違う国で生まれた本国の童話や昔話を日本語翻訳し、東川町の学童施設や図書館などへ異文化交流教材として設置できればと考えている。

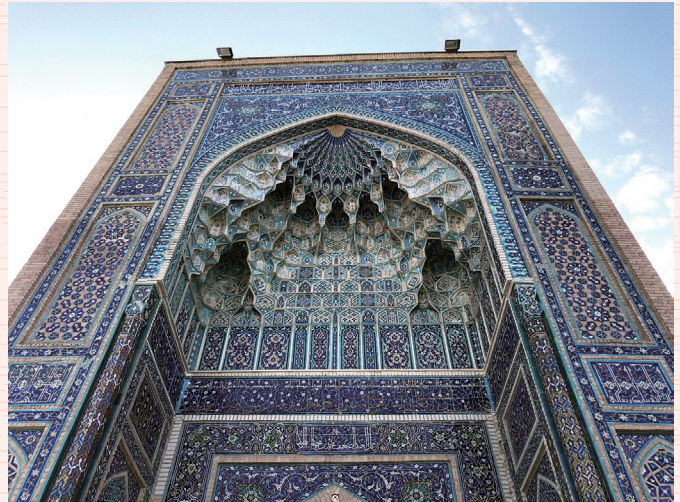
今までの東川町とウズベキスタンとの良好かつ積極的な交流を踏まえ、お互いの地域の発展と関係をより深めたいと考えている。

写真特集

ウズベキスタン



レギスタン広場（サマルカンド）



ティムール廟（サマルカンド）



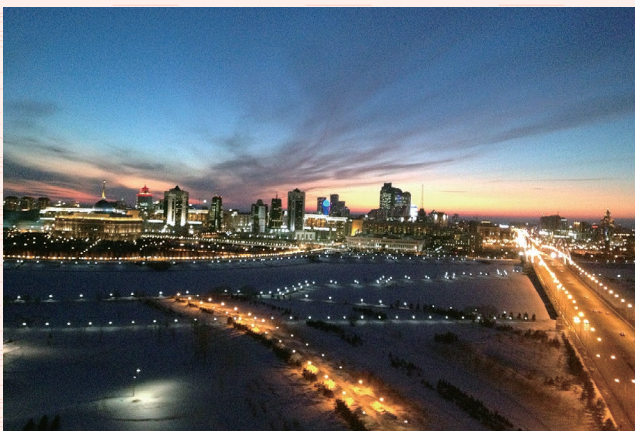
日本人抑留者資料館（タシケント）



チョルスーバザール（タシケント）

写真提供：舞鶴市市民文化環境部スポーツ振興課

カザフスタン



アスタナ新市街



バイテレク（アスタナ）

写真提供：外務省

キルギス



ユルタとイシク・クル湖 (イシク・クル州)



アラトー広場 (ビシュケク)



山の風景

タジキスタン



カラクリ湖

トルクメニスタン



アシガバットの街並み



中央アジア最大のキプチャクモスク (アシガバット)

写真提供：外務省